

主と官府との癒着、その結果としての大土地所有の展開は、明初の社會に元朝のつげとして引き渡された。有名な洪武朝の疑獄事件は、一つにはこうした状況からの脱皮のために斷行されたものだろう。官僚機構の改革と並行して、鄉村では、いわゆる利益追求型富民・地主層に對する籍沒・移徙等の徹底した彈壓が加えられた。王朝の理念としての富民像は、あくまでも鄉村維持型にあり、富民・地主層の淘汰を経た上での明朝支配の確立が圖られたのである。ここに理念に適用一つの典型として、義門鄭氏がクローズアップされることになる。本報告では、鄭氏という一地主家族を通して、元末明初の江南社會の状況、ならびに明朝の性格を検討したい。

李朝後期の水利開發について

宮嶋博史

朝鮮農業と水の關係を考へる場合、二つの自然條件が大きく関わってくる。その一つは氣候條件、とりわけ降雨量である。朝鮮半島の降雨は、年間降雨量では中國華北と日本との中間的な數値を示すが、月別降雨量の分布では華北と似通っているという特徴を持つ。すなわち七〜九月期に年降雨量の六〇パーセントほどが集中し、春季の乾燥が甚しいのである。また梅雨前線は朝鮮半島にまで北上しないことが多く、これが田植法の普及を遅らせた最大の要因であった。

もう一つの自然條件は土壤である。李朝時代には中國や日本に學

んで、水車を製造・普及させる努力が繰返し行なわれるが、盡く失敗に終わっており、その最大の要因は土壤の排水性が良すぎるといふ點にあったようである。

以上二つの自然條件に規定されて、水の安定的かつ十分な供給には困難が多く、李朝時代の農業發展の重點は、むしろ耐乾燥技術の開發に置かれたと言いうる。しかし一方で水利開發の努力が持續されたことも事實であり、特に十五世紀前半と十八世紀は大規模な水利事業が集中した時期として注目に値する。報告では、後者の時期の水利開發の實態とその特徴を、前者の時期と比較しつつ論じてみたい。

漢代賢良方正科考

福井重雅

漢代の官吏登用制度は、從來一般に郷舉里選の名によって知られているが、それは大別して州郡の長官が推す孝廉・茂才などの推舉制度と、中央や地方の高官が擧げる賢良方正などの察舉制度という二つに分けられる。前者は毎年郡國の人口に比例した一定の員數の該當者を推舉する定期的な選舉法であり、後者はいわゆる天變地異などの異常事態が発生したばあいに、皇帝自身が候補者に直接策試する非定期的な選拔法であつて、それらは後世一般にそれぞれ常科（常舉・歲舉）と制科（制舉・特舉）とに區別され通稱された。

この選舉制度のうち、少なくとも前者の科目については、これま